
囚人ゲーム

カカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚人ゲーム

【Nコード】

N6537Y

【作者名】

カカ

【あらすじ】

上坂はどんどん近づいていく。「囚人ゲーム」へと。

第一章 主人公を待つもの

人の気配がない山奥に、黒塗りの自動車が走行していた。

その先頭を走る車の後部座席に、その男はいた。

上坂真二。髪は黒色で、まとまっている。切れ長で大きな目。モデルのような体。人目を引くその外見だが、ところどころにアザがある。連れてこられるときに、争った後だった。

手足は縛られており、口はふさがれていた。

舗装されていない山道に車が大きく跳ねる。その振動で、アテルが目を覚ます。

「ん、うううん」

目をゆっくりと開けるアテル。その瞳は漆黒と表現できるような、まっすぐな黒色だった。

「ん、」意識がはつきりしてきた。目を完全に開く。

「んんーんんー」

口をふさがれているので、言葉にならない。

運転をしている黒服の男が上坂に気づく。

「気がついたか、上坂真二。静かにしている。もうすぐ目的地に着く。」

状況がまったくつかめない上坂。

どこだここは？確か、そうだ。黒服の男がいきなりやってきて俺を。

23時間前、夜10時。

上坂がいた刑務所の消灯時間。いつもと同じように囚人は牢屋に入られ、鍵が閉められる。

上坂の牢屋の鍵も閉められた。

「はー今日も疲れた。もう寝るか。」

何事もなかったように独り言をつぶやき、ベットに倒れこむ。

30分後。上坂はまだおきている。ベットから顔を上げあたりを確

認する。物音ひとつしない。

全員寝たみたいだな。心の中でつぶやく上坂。

上坂は素早く体を起こし、牢屋の右上隅から左に3つ下に2つのところの石畳に向かう。

慣れた手際で石畳をはずしていく、石畳がはずれるとそこにはそこが見えない空洞があった。

上坂はそれを満足そうに見つめ、音が立たないように石畳を慎重に置く。

空洞からはわずかな風が吹き抜けてくる。外とつながっているようだった。

上坂がやるうとしてしていること、もうお分かりだろう。

それは・・・脱獄だった。

いざ穴へと飛び込もうとする上坂だったが、足が止まる。

カッーン、カッーン。上坂の耳に聞こえてくる、これは足音。

まずい、上坂は反射的に動く。石畳を素早く戻し、ベットにもぐりこむ。

足音は次第に大きくなってくる。上坂の緊張も高まる。

足音から察するに、だいぶ近くにいる。緊張の中上坂には疑問が浮かぶ。

まだ10時35分くらいのはず。巡回は1時間ごとに行うはずなのに？まさかばれたのか。

さらに緊張が高まる。足音の主はついに上坂の牢屋にまで来た。

過ぎろ、過ぎろ、通り過ぎてくれ。上坂が願う中5秒経過・・・足音がピタリとやんだ。

さらに数秒の沈黙。上坂の緊張が最高潮に、心臓は破裂しそうだった。

後ろからジャラジャラ音がする。

何をしているんだ？

振り向こうか、振り向くまいか迷っている時、きいいと音がする。

まるでドアを開けるときのような音だ。

ドアを開ける？まさか、と思い上坂が反射的に振り向いた途端、ハンカチのようなものに当てられた。

抵抗するが、意識が薄れていく。

くそ、くそ、やっと脱獄ができるって時に。外に出て復讐をしようってときに。

上坂が最後に頭に浮かんだのは、刑務所に流れていたあのうわさだった。

意識は完全になくなり上坂は眠りについた。

そこで記憶は途切れている。

俺は、あのうわさのとおり、刑務所から連れてこられたのか？

上坂が考えていると、車が止まっていた。どうやら目的地とやらについたようだった。

後部座席のドアが開けられる。開けたのは運転していた黒服の男。

「降りろ。」

黒服の男が短く命令する。

上坂は仕方なく命令に従う。車を降りて上坂が最初に目にしたのはとてつもなく大きな豪邸だった。

よく敷地の広さを東京ドームで例えられるが、これを東京ドームで例えるとすると、

東京ドームを20個並べた広さに、縦に5個並べたような大豪邸だった。

ここでカクレンボしたとしても3日かけても見つけられるか分からない。

呆然と眺めていると、黒服の男が縄を引っ張りながら、豪邸のほうとは別の方角に歩き出す。

ん？縄、見れば縄の先には上坂の首が繋がっていた。当然、上坂は黒服の男に引っ張られる。

いつの間に。上坂が思った瞬間、黒服の男は縄を容赦なく引っ張る。

上坂の首が前に引っ張られる。上坂の体が宙に浮いた。体が引きずられる。

「いててて、痛い、痛い。おいストップ、ストップ。止めるー」
上坂が絶叫する。

黒服の男は上坂のほうを見ようともしない。縄を引っ張る力を緩めようともしない。

「痛い痛い、いた、もうやめろー」

上坂は、引っ張られる力を利用し前方倒立回転する。上坂はうまく体勢を整える。

引きずられることなく、黒服の男と同じように歩いてついていく。黒服の男に追いつき肩を掴み取る。上坂は腕を引き、黒服の男をこちらに振り向かせる。黒服の男の胸倉を掴み取り、怒りと疑問をぶつける。

「てめー、ふざけんなよ。人を物みてーに引きずりやがって。だいたいここはどこなんだよ。

何で俺をこんなところに連れてきやがったんだ。もう少しで、もう少しで」

上坂はその先を言うことができなかつた。上坂の胸の辺りから、高圧電流が流れてきたからだ。

「がっ」

思わず倒れこむ上坂。

「ふう」

黒服の男が短くため息をつき、上坂の頭をつかみ取る。そして、倒れている上坂の頭を上げ、瞳を覗き込む。

「ふざんけんなよ、くそが。いつぺんに話すんじゃねーよ。質問なら後で聞いてやるよ。

今は黙ってついてくればいいんだよ。」

そういつて上坂の頭を離して、上坂を見下ろす。

「後お前はここに連れてこられた時点で、人じゃねー。物だ。覚え

とけ」

上坂は顔を上げる。黒服の男と目が合う。黒服の男の目は、人を見ている目ではなかった。

「くっ」

だいぶ楽になつてきた上坂は立ち上がる。

それを見た黒服の男は、何も言わないまま何事もなかったかのように歩き出す。

縄で引つ張られているので上坂も歩き出す。

ちっ、なんなんだよ、こいつ。何が物だ。馬鹿にしゃがって。それに俺の体からなんで電流が？

そう思いながらしばらく歩いてみると、ヘリコプターがそこにあつた。

黒服の男はヘリコプターの運転席に乗り込み、縄で上坂を後部座席に乗らせる。

ヘリコプターのエンジンがかかる。ゆっくりとあがっていく。黒服の男が話しかけてくる。

「今なら質問に答えてやる。3つまでな。」

上坂は迷うようにためらいながら、疑問を3つぶつける。

「まず、どうして俺がここに連れてこられたんだ。

それに、ここはいったいどこなんだ。

お前は誰なんだ。」

黒服の男は無表情で淡々と答える。

「お前にはあるゲームに参加してもらつたため。」

「ここは、私の雇い人の前田様のお屋敷。」

「私はただ雇われただけの人間だ。」

「ゲームって何のことだ、それに前田って」

上坂の言葉が詰まる。黒服の男が銃口を上坂に向けていたからだ。

「質問は3つまでだ」

「ちっ」

上坂は舌打ちする。言えなかったことを心の中でつぶやく。

前だつて言えば、日本で一番の大富豪つて言われるあの前田か？それに何でヘリコプターなんか。

その答えはすぐに解けた。ヘリコプターから外を見ると、それは迷路だった。一度入ったら二度と出られないような複雑な迷路。上から見てもまったく分からない。

それからしばらくするとヘリコプターは豪邸の前で着陸した。

上坂と黒服がヘリコプターを降りる。黒服の男は、

「中に入れ」

とだけ、短く言い豪邸の扉を開けさつさと中へ入っていく。

上坂はおかしなことにきずく。

「あれ、引つ張られない？」

自分の首を見てみるといつの間にか縄が外れていた。

「いつの間に。」

上坂はゆっくりと歩いていき、扉の前に立つ。

上坂は悟っていた。この中に入ったらもう後戻りができないこと。

黒服の男が言っていたゲームが命に

かわかること。そして、復讐を果たすためにはこの中に入らなければいけないこと。

上坂は意を決して扉に手をかける。一度大きく息を吸い込み手に力を込める。

上坂は中へと入っていく。

「囚人ゲーム」が始まろうとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537y/>

囚人ゲーム

2011年11月20日07時17分発行